

華岡青洲に宛てた杉田玄白の書簡 続報

長谷川 弥

袖ヶ浦市

日本歯科医史学会誌 28巻3号 2010年4月 195ページ, 196ページ掲載の文中に誤りがあったので次のごとく訂正する。原文筆写10行目, 「被勞御精心之段」の之を候に訂正, 195ページ本文34行目から196ページ3行までを削除し, 「玄白が亡くなる4年目の80歳のときにしたためられたものであ」を挿入する。

杉田玄白書簡解読文は下記の通りである。

未だ貴意を得ず候え共、一書呈上致し候。時分柄敵暑と相成り候え共、弥々御安清に成られ御座候、目出度く存じ候。然れば老兄の御高名江戸表まで相聞え、御頼もしく存じ罷り在り候所、旧年以来兼て御隨身と申し罷り在り候由、宮川順達と申す加賀の書生出府致し、委しき御尊承知致し候。数年御治療の所、御精神勞われ候段、ほぼ承りさて々、御頼もしく存じ奉り候。老拙儀も二三世、外治を以って旦那家に仕え罷り在り候事故、何卒生民の為、少なくとも治業これ専ら工夫致し候て、益にも相成りたく、年来心懸候え共、差したる儀もこれ無く犬馬の老積り、最早当年八旬に及び、空しく朽ち果て申すべく残念に存じ奉り候。

去りながら、老驥伏櫪の志は相止み申さず、折節不審の儀、これ有り候え共、本科は格別同業の者には海内承り及び候者もこれ無く候。幸い老兄の御尊承り及び候え共、是まで好縁も御座無く、罷り在り候所、順達罷り越し候て、御手術御煉熟候段、申し聞きさて々感心致し候事に御座候。江戸表は御聞き及びもこれ有り候哉。手を下し望はば宜しかるべしと存じ候。

病人も問々これ有り候え共、皆白面貴价公子のみにて病苦を忍び候者これ無く、拙業とは存じながら、その術施し難く打ち過ぎ候ことばかり多く、これあり候て遺憾少なからず候。

去りながら、以来不審の儀もこれ有り候はば、御文通にて成り共、御相談申したく候。拙者は老衰に及び候え共、倅共の為にも御座候間、彼等より申上げ候事もあるべく御座候。

御許容成し置かれるべく申し候。順達より書面差上げ候様承り候間、卒忽ながら申上げ候。

以来御知己の内へ加え置かれるべく申し候。頼み奉り候。恐惶謹言

杉田玄白

五月四日

翼 花押

華岡随賢 様

人々御中

解体新書を出版し、蘭学界の重鎮であった杉田玄白が80歳の文化10年5月4日(西暦1813年6月2日)に華岡青洲に宛てかかれた手紙である。このとき受け取った華岡青洲は53歳で通仙散による全身麻酔で乳癌の摘出手術に成功した10年後のことであった。その偉業は江戸表まで鳴り響き、杉田玄白感激のあまり父子ほども年の差があるのにもかかわらず、非常に謙虚で丁寧な文面の手紙を出した。倅共の為にもと教えを請うた玄白の願いは、その年の内に杉田立卿により江戸で全身麻酔による乳癌の摘出手術が行われたことで玄白の願いは叶えられたとあってよい。この事実は「療乳崑記」により明らかである。

また、大槻玄沢も同様の手紙を青洲に出している。